土浦発

未来への伝承 ⑱

土浦藩の関流大筒「抜山銃」（市指定文化財）

天文12（1543）年に種子島（鹿児島県）に伝来したとされる火縄銃は、日本の戦を一変させたといわれるほど、大きな影響を及ぼしました。

火縄銃を扱うためには、多くの手順を踏まねばなりません。まずは火縄に着火しておきます。火縄は竹や檜皮などを縄状にし、これに硝石を吸わせて火を保つもので、火縄銃の語源となりました。次に銃口から火薬と弾丸を装填し、カルカと呼ばれる棚杖で銃身の奥へしっかり押し固めます。火皿に点火薬である口薬を入れ、火蓋を閉じ、火の点いた火縄先を火挟に挟みます。そして、的を見定めたのち火蓋を切り、構えて狙いを付けて引き金を引きます。

抜山銃（全体像）

火縄銃を使うには、火薬の製法、射法などの技術を学ぶ必要があり、これらを教えて生計を立てる砲術家が登場しました。諸国を修行しながら火縄銃を教える丸田久左衛門盛次はそんな砲術家の一人でしたが、直江兼続に懇願されて京都から米沢に移り、米沢藩上杉家に仕えるようになったといいます。関流砲（炮）術の祖、関之信（1596～1671）は父上信が米沢藩士であったため、17歳のとき、盛次から火薬と張筒の秘伝を授けられ、22歳で免許である印可状をうけました。

之信は、その後江戸での砲術修行を経験し、その技をもって久留里藩土屋家に仕え、続いてその分かれである土浦藩土屋家へと仕官先を転じます。しかし、各地を渡り歩く砲術家の気風もここで終わりを告げ、之信を開祖とする関流砲術は土浦藩を代表する武芸の一つとして幕末まで修練、稽古が続けられました。

之信が近江の名工国友大掾橘宗俊に発注した火縄銃に「抜山銃」と金象眼が施された250匁筒があります。「動かないとされる山をも動かすほど強い力をもつ」という名の大筒は、総重量25kg、打ち出される弾丸の重量1・8kg、射程距離は2・8kmといいますから、その名に恥じぬ威力です。

砲身の裏には寛永10（1633）年から寛文6（1666）年にかけて「抜山銃」が使用された「町打」の記録が刻まれています。町打とは10町（およそ1km）から30町も先の遠距離の的をねらうものです。実際に、寛永10年2月12日、之信が久留里で行った町打では「抜山銃」から放たれた3発は22町飛びました。爆音が遠くまでとどろきました。

「抜山銃」と金象眼が施された火縄銃の砲身

「抜山銃」と同じ関流大筒「谷神」を、5月6日（月）まで「開館25周年記念土浦市立博物館第34回特別展『婆娑羅たちの武装』―戦国を駆け抜けた武将達の甲冑と刀剣―」において展示室2で展示しています。

問市立博物館（☎824・2928）